

Forest

2011.11.2 3学年通信 第9号



今日は進路を決めることにちょっと似た話から…

☆ 晩御飯の献立がきまらな〜い・・・
としょっちゅう悩んでいるある奥さんの話です。

いつも「晩御飯、何にしようか？」って
すごく時間がかかるのよ。

でも、とりあえずでも決めると、そこからは早いよね。足りない材料を買いに行ったりできるし(買い物に行ったら変わっちゃうこともあるけど)。

悩む時間は「あ〜、料理ってめんどくさい！」って思っちゃうの。

「そうそう、私も」と思った方も多いのではないのでしょうか？確かに決まるまでのイライラはいやなものですよ。

「あれがいい」と思っても「自分が作るにはめんどくさすぎる」「きっとできないだろ

う」などと考え始めると、作る気力もうせてきます。

☆ この話は「進路を決める」と似てるところがありませんか？

もちろんまったく同じというわけにはいきません。けれども「ちょっとヒントになる」と思うのです。

「自分の進路は自分で決める」と言われても「決める」というのはなかなか難しいこと。「志望に向かって頑張る」などと言われても、「まだ、どこも行きたくないよ。将来のこともあんまりわからないし…」などと思うと、それ以上考えるのもいやになります。勉強にも力が入りません。

こういう状態はいやなものですよ。それを解消するにはさっきの料理の話のように、「とりあえずどこか決めてみる」というのがいいような気がします。また、「とりあえずでなければ決められない」という面もあると思います。ここで、ちょっとある本で読んだ座談会の話を紹介しましょう。

板倉…中学3年あたりで初めて決断しなきゃならない。怖すぎちゃうんだね。…「どんな進路がいいのか」なんていうのは、うんと原理的にいうと本人だってわからないんだ。…人生なんていうのは先が見えたら面白くないけど、実際には先が見えない。先が見えないものを「〇〇に行かなきゃいけない」とか「こうでなきゃいかん」ということは言えるはずがないんだ。「たまたま受かりそうだから受けた」とか「いや、落っこちそうだから受けた」とか。…「先が見えないのに、たまたま選ぶ

んだから固執しなくてもいいんじゃないか」というわけ。落ちた時に「もしかしたらシメタなのかもしれない」んだから「新しい、違うことをがんばろう」と思えばいい。そういう気持ちの余裕がほしい。

小原 そうか、「たまたま決める」ということでいいんだ。…ビシッと決めなくていいんだ。…

板倉 うん、たまたま決めるんだよ。「適性があるかどうか」なんていうのはなかなかわかんないし。他人にはとうていわからない。ただ、他人は、本人のことはよくわからないけど、本人とは関係ない情報を持ってるとしよ。「授業料が」とか、「あることで定評がある」「名前がいい」とか。「それをちょっと教えてほしい」という時に教えてあげればいいわけです。(後略)
雑誌『たのしい授業』NO 104 仮説社

発言者は、板倉聖宣さん（国立教育研究所名誉所員）、小原茂巳さん（東京、中学教諭）

とあえずで一步スタート

スーパーに行ってみて、献立が変わるように、実際にその学校を見に行つて「やっぱりやめた」と思つて予想の変更をすることもあつていいでしょう。

何より、自分が動くことで進路を考えることが具体的にできるようになるでしょう。

保護者のみなさまへ

子どもたちがイライラする季節になってきました。まだ14, 15歳の子どもたちが大きな選択を迫られているのですから、イライラするのも当然のことなのでしょう。

それを一番身近でつきあう保護者の皆さんとしては「子供以上にイライラしてる」と考えられる方もいらっしゃるかもしれませんが。

けれども、やっぱり不安なのは、実際の渦中にある子ども自身。「何も考えてない」ように見えるときこそ、子どもたちにとって一番苦しい時期かもしれません。

希望のはっきりしている子にははげましを、そして、はっきりしていない子にも「とりあえずでも決めて、実際に見てきたら」というようなアドバイスを願えたらと思います。

みんなすてきな子どもたちです。子どもたちの反応を一番の目安にして「子どもたちは何を必要としているのか」をその時その時、一緒に考えていきたいです。

11月4日(金)

**校内で模擬テストがあります。
制服での受験ですので、よろしく
お願いします。**